

男の嫉妬

企業経営漫談士 岡野実空

政財界の不祥事が続きます。多くは環境変化が引金となっていますが、その真因を掘り下げていくと、しばしば人間の性(さが)が浮き彫りになります。代表は、「男の嫉妬」。そのタチの悪さは、男が権力を握る機会が多く、それを解消する手段も豊富なこと。しかも最近の脳科学研究によると、男性の方が女性より、相手を貶めることに喜びを感じるとか。ということで今回は、イノベーションの「壁」ならぬ「落とし穴」、男の3大嫉妬の背景と対策を考えます。

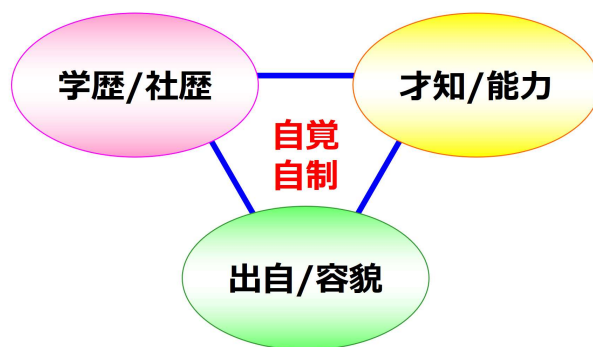
1:出自／容貌

出自や容姿で親を恨んでもムダ。我々は親を選べません。実社会には、それに起因する様々な「差別」が存在しますが、幸い我が国では、自分の努力などで克服できる可能性のあるものがほとんど。そんな差別を感じたら、酒などによる発散ではなく、反発のエネルギーを読書などの「自分磨き」に使いましょう。その努力は顔立ちや言動を改善し、その後の人生に好影響を与えます。いまその反面教師は、別称「ジェラシック・パーク」と呼ばれている財界の総本山「日本経団連」。右肩上がりという時代運に恵まれた老人たちが、「大過ない」過去の実績を上げ底にする、「勲章」争いに明け暮れています。しかもその手段は、陰湿な足の引っ張り合い。そんな日常を送っていれば必ずと貧相になります。政界の後を追ひ、財界でも「よい」(善・好・佳)顔をめっきり見かけなくなりました。中高年の「顔」は自分の履歴書そのものです。

2:学歴／社歴

各社幹部層との会談で、よく出身大学や企業を尋ねられることがあります。この方々の差別はまず「学歴」から。気にしているからこそ話題にするのですが、それは単なる「学校」歴。そして次なる関心は「学部」歴。公益事業や金融など、仕事そのもので差がつきにくいインフラ系の業界では、呆れるほど頻繁に起きることですが、まともな業界、企業の「学歴」は、学生から現在に至るまでの「学識」歴です。すなわち、物事を的確に判断・実行する「知識」「見識」をどのくらい習得、蓄積しているか。私たちは「情報」や「理論」など「わかっているつもりのこと」を、五感を使う「経験」を加え、本当にわかっている「知識」に転換しているからです。かつてソニーを筆頭に「学歴無用論」が流行りました。マスコミが大騒ぎする「学校」歴は無意味ですが、「学識」歴は実業に必要不可欠。しかもそれは生涯エンドレスの学歴です。

E-19 男の嫉妬



3:才知／能力

「知識」や「技術」があつという間に陳腐化する時代。そのため私たちは、過去修得したものを絶えず見直し、新たな学習を続けていく必要があります。他人や若手の才能を羨んでいるヒマはありません。かつて永世棋聖の故米長邦雄氏は、若手棋士の台頭で次々とタイトルを失ったとき、自ら「米長道場」を開き、研究会を主宰しました。そして後輩を教えるのではなく、逆に「若手に教えるを請う」ことによって、自分の将棋を全面的に見直し、その成果として、念願の名人位を49歳で獲得するという快挙を成し遂げました。しかしいま、経済界では逆の話ばかり。創業者でもない経営者たちが長期に権力を握り続ける理由は、次世代の才能を恐れ、トップとしての試行錯誤の機会を与えないためです。彼らの言い訳はいつも、「後継者が育っていない」という自己矛盾。彼らが去った後、その企業の惨状を見れば、その老害は明らかです。

「男の嫉妬」は他にもさまざまありますが、私たちがとるべき姿勢はただ一つ。「人のふり見て、我がふり直せ」。アリストテレス曰く、「ねたみを避ける最良の方法は、自分が成功に値する人間になることだ」。

平成29年6月12日 実空